

九州朝陽会報

平成二十四年十一月一日発行第十九号

『核のゴミ』で

原発は行き詰まる

株式会社 中陽 相談役

豊田 信夫 (新7回)

一九五五年十一月原発建設を前提としない『日米原子力協定』が調印された。原発と距離を置く筈の政府の原子力委員会は翌五六年一月初代委員長正力松太郎氏主導で『五年以内に原発建設、米国と

動力協定の締結』と言う構想を発表。五七年三月これに抗議して委員の一人の日本人初のノーベル賞受賞者の物理学者湯川秀樹氏が辞任した。湯川博士の辞任の弁は「動力協定や動力炉導入に関して何等かの決断をするという事は、我が国の原子力開発の将来に対して長期に亘って重大な影響を及ぼすに違いないのであるから慎重な上にも慎重でなければならぬ」と言うことである。高名な湯川博

士の辞任は大きなニュースであったが、当時二三歳だった小生にはその意味がよく分からなかった。

今思えば湯川博士は米国主導の日本の原発開発の50数年後の今の姿を見通していたような気がする。その後原子力委員会は歴代自民党政権に牛耳られ、安全性を二の次にした原発推進機関に変貌していった。そして日本の電力業界は引き返すことのできない原発開発コースへと踏み出したのである。

原発スタートから40年位の歴史で、被爆国であり地震大国でもある日本にいつの間にか54基もの原発が林立して危険な『原発列島』になっている。大事故から一年半以上過ぎた今も崩壊熱、汚染水、水素爆発等の危険を抱え収束のメドが立たず、10万人を越える人が故郷を追われ避難を余儀なくされ、汚染地域に除染という厄介な問題を引き起こしている。それなのに原発利権に群がる政官業の『懲りない面々』は『安全』よりも『再稼働ありき』で『電力不足が経済へ打撃を与える』と言う殺し文句で国民を説き伏せよう

としている。

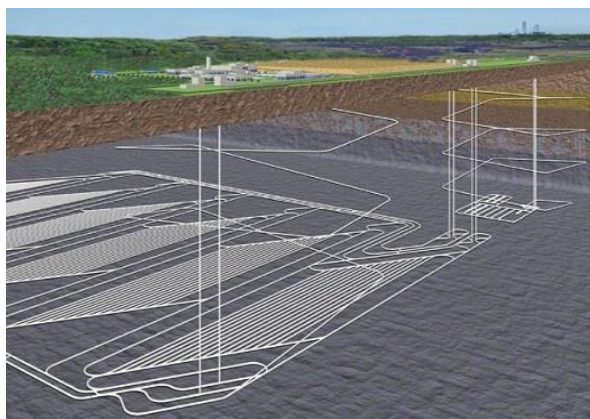
放射能被害から国民と国土を守ることよりも、自らの利権を最優先する原発推進派は『核のゴミ』についてどのように考えているのであろうか。『核のゴミ』が将来原発を行き詰らせる危険性をはらんでいる実態をマスコミは詳しく調べて、国民に真実の姿を伝えるべきである。原発の稼働は使用済核燃料の後始末という避けて通れない、とてつもなく厄介な問題を抱えている。日本中の原発から出される使用済核燃料は年間800

〜1000トン、これを受け入れる日本で唯一の場所は、青森県下北半島に位置する六ヶ所村にある原子燃料サイクル施設である。核燃料サイクルのため本来はここで再処理されてウランとプルトニウムと高レベル放射性廃棄物に分離されるが、二兆円以上をかけた再処理工場がトラブル続きで未だに稼働せず使用済核燃料は溜まる一方で、六ヶ所村の貯蔵施設はまもなく満杯となる。六ヶ所村で受け入れできなくなれば、各原発敷地内にある使用済核燃料プールが満

杯になり稼働停止になる。仮に再処理工場が稼働しても、出てくる高レベル放射性廃棄物は特殊なガラスに封じ込めてガラス固体化し、50年かけて冷やした後、地下300メートルの地層に埋めなければならぬ。

一方作業員が使用した防護服や布などの低レベル放射性廃棄物は焼却してドラム缶に詰め、各原発敷地内に一旦保管後、六ヶ所村に運んで閉じ込める。30年間閉じ込め放射能が弱くなって最終的には300年間地下に埋めて置く。低レベル放射性廃棄物はドラム缶にして毎年4〜5万本出るといふ膨大な量の『核のゴミ』の処理には気の遠くなるような期間とスペースと時間が必要だ。驚いたことに原発を持つ世界各国とも『核のゴミ』の最終処理の場所選定に頭を痛めているという。日本と違って広大な国土を持つ米国ですら溜まり続ける『核のゴミ』の問題で悩んでいる。どこの国も『核のゴミ』の最終捨場を決めないで原発運転を見切り発車していたのだ。世界で唯一、『核のゴミ』

の最終捨場を準備している国がフィンランドである。



オンカロ地下施設完成概念図

四月十日NHK総合テレビでフィンランドの『オンカロ』に初めてNHKのTVカメラが入った様子が放映された。『オンカロ』とはフィンランド語で『隠し場所』という意味。オルキオトという町の新設敷地内に、地下400メートルに達するまで延長5キロメートルもある車の通る巨大ならせん状の穴を掘って、核廃棄物の最終捨場を準備しているのには驚かされた。核廃棄物を40年かけて冷やして鉄の管に入れ、その上に銅管で覆って地下400メートルに

捨てると言う壮大な計画である。今後100年かけ120年分、120000トンの核廃棄物を埋めて10万年間密閉するというそのスケールの大きさに圧倒された。それでも数百年は熱を発生しカプセルの表面から放射能を出し続けると言う。注目すべきことは地域の住民が取材にたいして「我々は原発から多くの恩恵を受けているので、『核のゴミ』の最終処理まで責任を持つのは当然」と答えていることだ。原発交付金で潤う日本の自治体で『核のゴミ』の最終捨場として手を挙げるのは皆無ではないか。

原発の寿命は40年位。一九七六年後半に本格化した日本の原発はこれから『廃炉時代』に入る。だが大量の放射性廃棄物の処分方法を決めないまま進めて来た原発行政のツケが重くのしかかっている。福島第一原発の1〜4号基はもう廃炉だ。テレビで見るとその構造物は巨大で、しかも大量の放射性物質が出るため解体には30〜40年掛かるだろう。『核のゴミ』は六ヶ所村の地下に300年、気

の遠くなるような年月と莫大な費用に国と電力会社は耐えられるのだろうか。一九八六年の旧ソ連チェルノブイリ原発事故から26年経った今、放射性物質漏れを防ぐためかぶせられた石棺の老朽化が進んだことから、さらに上から覆って密閉する鉄製アーチ型の巨大構造物の建設が始まっている。フィンランドのように地下400メートルに埋設するのは今の段階ではベストな方法としても10万年先の世界がどんなになっているか誰にも分からない。現在の『核のゴミ』の処理は放射能の危険性を将来の子孫にツケを回すことになり、自分たちはもう死んでいて「知らないよ」ということだ。まことに身勝手な話である。

危険きわまる放射能に人間は防御する術がなく、農業も漁業も畜産も全てを失うことが分かった。核分裂による巨大なエネルギーと人類は、ゼロにできない事故のリスク、ひとたび事故を起こした時の悲惨さ、気の遠くなるような巨額の処理費用、『核のゴミ』に天文学的な金が掛かる事、等を勘案し

てもまだ共存できないというのが結論である。謙虚さを欠いた、足ることを知らない、貪欲な人類はパンドラの箱を早く開けてしまったのだ。広島、長崎の悲劇、米スリーマイル島、チェルノブイリの悲劇、福島の悲劇と続くだけでは済まないだろう。地震、津波という自然災害に無抵抗な我々は、もう一度原発事故を起こして東京、大阪が汚染されれば避難する場所はどこにもなく日本という国がおかしくなることを学ばねばならない。ドイツが『原発撤退』の方向を決定したように、すぐには出来ないにしても原子力依存から脱却して、再生可能なエネルギーへの転換を計る長期プランを立てる時が今来ていると思う。

(2012・9・21寄稿)

今年度総会

日時

平成24年11月11日(日)

16時から19時まで

場所

福岡市天神

中華菜館「福新楼」

連載「新宿の思い出」
第八回 胴上げ

九州朝陽会名誉会員

佐藤 喜一（新1回）

ノムさんの大きな身体が宙に浮いた。ひい・ふう・みい・よ、五度舞った。09年度のパシフィックリーグ・クライマックスシリーズ第四戦の終了後である。場所は、この日勝って日本シリーズ進出を決めた日本ハムファイターズの札幌ドーム球場。



両チームによる 野村監督の胴上げ

午後六時ちょっと前にテレビのスイッチを入れたら、楽天の赤いユニホームにまじって日ハムの白い選手たちが、野村さんに挨拶をしている。監督として最後の戦い

を終えた先達に敬意を表しているんだろうと思っていたら、赤・白のユニフォームが交ざりあったの胴上げが始まったのだった。実にいい絵だった。ノムさんの笑顔もよかった。

☆

昭和五十年代、私は公式野球部の顧問をしていた。ユニホームは着ないが、公式戦ともなると、神宮球場や駒澤球場のベンチに入って、試合の経過を見続けていたものだった。

昭和54年のチームは強かった。「都立の星」などと騒がれたが、準々決勝で関東一高に惜敗して甲子園への夢は消え、私の宙に舞う夢も消えた。されど・・・。
二度、宙に舞ったことがある。いずれも生徒たちからのありがたいプレゼントだった。

一度目は、昭和57年3月13日。新宿高校第34回卒業式の日。その学年は私が学年担任という総括責任者でもあったので、自分のクラスにだけでなくあれこれと気を使うことが多かった。それだけに愛着の深い学年だった。卒

業式終了後教官室で小休止していると、クラスの何人かがやって来た。ちょっと外へ、と言う。何事ならんと出てみると、少し離れた校長室の前にかのりの数の生徒がいた。行った。

とたんに胴上げが始まった。どうして？。と一瞬疑ったが、皆が思い思いキイチセンセイありがとう！と言ってワッショイワッショイとやった。驚いて出て来た校長は事情をすぐ知って、微笑んだ。

十三年前の11月5日、新宿全共闘を名乗る生徒たちが乱入して占拠された校長室。その前の廊下だった。この二代目の校舎はすでになくなった。

二度目は、私が新宿高校を退職した昭和62年の春。4月11日に第19回生（昭和42年卒業）の卒業二十年の会が新宿三井クラブであった。久しぶりだからクラス担任のモト生徒たちに二次会へと誘われた。西口の駅前広場にさしかかった時、身体が浮いた。
輝き始めた街の灯りがとても綺麗だった。小田急・京王の入口に近く、通行人が多い。いささか恥

ずかしかった。でも、嬉しかった。バンザイというような声もあった。じいんときた。

☆

胴上げした方はそう永くは記憶していないようだ。しかし、それの方は、経験が少ないほど思い出はなかなか消えないのでは？。そのシーンを今でも鮮やかに甦らせることができるのは、それが滅多にない非日常的なことだからだろうか。

名監督ノムさんには数々の胴上げの経験があるだろう。しかし、七十四歳にして卒業、という夜のそれは、一生忘れられないものになるのではなからうか。

喜寿の同窓会に参加して

九州民放OB会事務局長

大谷昭示（新5回）

今年の六月四日、東京新宿のハイアット・リージェンシー東京で、私どもの全体の同窓会があり参加しました。昭和28年卒新5回です。卒業以来五九年目の同窓会です。全体の同窓会はこれで4回目、

最初は在職中でしたから、多分卒業三十周年の時だったと思います。ついで還暦の年、次が古希を迎えた年、そして今回の喜寿です。節目節目に開いてきたわけです。卒業生400名余のうち参加者は99名、比率からいって、女子は四分の一ぐらいいてもいいはずですが、昔胸をときめかした彼女たちは意外と少なく、寂しい思いがしました。九州に離れていると、旧友たちと接する機会は少なく、名札を見て「やあ、君か!」とお互いに確かめ合う有様でした。

驚いたのは、物故者がなんと97名もいたことです。今年の正月に年賀状をいただいて再会を楽しみにしていた友人が亡くなっていました。それになぜか、東大法学部出の物故者が多いのです。高度成長経済期からバブル期へ、そしてバブルがはじけて退職と、激動の時代を先頭に立って走ってきたからでしょうか。次は八十歳になつたらまた会おうということも別れましたが、果たしてそれまで何人が元気でいるでしょうか。

(2012・9・25 寄稿)

事務局からのお知らせ

・決算報告

平成二十三年年度(平成23・10・1から平成24・9・30)事務局の会計報告は別記のとおりです。お陰様で今年度も34,867円の次年度繰越金を残すことができました。

・会員動静

去る九月十一日にかねてよりご自宅で療養されていた大先輩の樋口大成さん(旧17回)がお亡くなりになりました。また新聞報道によれば宮澤信雄さん(新6回)が十月十一日にお亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

尚、会則十一條の年会費未納により、下記二名の方が残念ながら退会となりました。

岩切徹郎(中19)

退会

佐藤喜哉(新40)

退会

従つて十月末日現在在籍会員は六十名です。

・新年度会費納入のお願い

同封の**振込取扱票**にて新年度会費を早めに納付してください。

総会に出席を予定されている方は当日会場で徴収いたしますので、振込票は入れてません。

編集後記

前号は企画していた原発問題特集がはたせませんでした。豊田信夫氏からご寄稿があり、皆さんのこの問題に対する再考のきっかけになればとの考えで、冒頭に掲載いたしました。

九州朝陽会平成23年度決算		
始平成23年10月1日至平成24年9月30日		
勘定科目	金額	摘要
(収入)		
本部交付金	30,000	
22年度総会会費	126,000	18名*7,000
前期繰越金	21,887	平成22年度
忘年会特別会費	50,000	10名*5,000
石井会長卒寿祝会費	25,000	5名*5,000
福岡銀行利息	1	
年会費収入	53,960	58名納付
計	306,848	
(支出)		
通信連絡費(a)	19,400	
事務用品費(b)	28,606	
慶弔費(c)	2,026	樋口氏弔電
幹事会費(d)	2,120	
総会会場費(e)	128,799	福新楼
その他(f)	91,030	忘年会、会長卒寿祝会他
計	271,981	
次期繰越金	34,867	
(内訳)		
現金	31,050	
郵便預金口座	548	
郵便振込貯残高	2,740	
福岡銀行口座	529	

「核のゴミ」といえば、この春テレビでの討論番組で当時自民党幹事長の石原伸晃が、「危険というけれど、放射性廃棄物の処理方法など今の技術水準なら十年もすれば解決する。」などと笑って語っていた。この時私はあらためてこの国のかじ取りを担う政治家(否政治屋)の浅はかな思考判断に呆れたものである。

北欧のような比較的安定した地盤の地域、あるいは米国、ロシアのような広大な国土を有する地域と違う、地震そしてそれに伴う津波に無防備な四周を海に囲まれ、いつ起こるともわからない火山をあちこちに有する狭隘な我が国。

こんなところに放射性廃棄物を50年あるいは100年も安定的に存置できる場所などあるのだろうか。

これまでひたすら経済成長を目指し、それを実現しエコノミクシアニマルと世界に押搦されてきたこの国は、いまこそ昨年の大災害を期に、地球規模で人類の真の幸せを追求する社会システムを再構築する先進国を目指すべきではないでしょうか。

編集者記

【発行元】
九州朝陽会事務局
福津市若木台1丁目
20-7
Tel/Fax:0940-43-5545
Mail:kjun612@nifty.com

【編集者】
九州朝陽会 幹事長
小泉 純理
(新7回)

